

# 戦前戦時における中国民謡の機能——雑誌『満蒙』を中心に

## A Study about the Effect of Chinese Folk songs based on *MANCHURIA*

王 占一  
WANG ZHANYI

Japan has the south part of Middle-East Railway and the right to operate of Fushun Coal after the Russo-Japanese War. In 1906, Japan established the South Manchu Railway Co. Ltd. and a number of immigrants from Japan as pioneers take this opportunity to ‘develop’ Manchu. At meanwhile, the local culture influence and interfere with “Manchu Railway”. Japan began to publish newspaper and magazine in Manchu, which is known as “Cultural Development”. For instance, the official magazine called *THE LIGHT of MANCHURIA*, which published by The Culture Association of Manchuria in 1920; it has been renamed as *MANCHURIA*. Japan is study the data about China in detail that basis on the survey and research though the newspapers and magazines. The main purpose of the study is the crucial task of national characteristic. According to the *MANCHURIA*, the Ballad of national character and social reality has become the most important reflects in the research. In the 1930s, a number of study books of Chinese folk songs have been published in Manchu. Some of them even still republished after the war. On this paper research is based on the *MANCHURIA*, which will focus on the Japanese interests at that age. As start the analyses on the data of Chinese folk songs or Manchu folk songs, and explain the study of how the Japan observe the Chinese society by folk songs study, and what is the role of folk songs played in this process. In addition, this paper also discusses the change of Chinese folk songs from 20s to 40s. This paper is divided into five parts, Japanese studies of Chinese folk songs and question consciousness; Chinese national character in folk songs; the image of China or Chinese in folk songs; the different landscape in Manchuria's new folk songs; resistance and marginalization of political folk songs.

キーワード 雑誌『満蒙』 満洲 民謡 機能 国民性

Keywords *MANCHURIA* Manchu folk songs Effect national character

### はじめに

日露戦争後、日本は東清鉄道の一部である南満州鉄道を獲得する等の満洲における権益を得ることになった。また、1906年11月に満洲における最大の植民地会社「南満洲鉄道株式会社」（以下「満鉄」）を設立し、満洲において鉄道運輸業を営み始めたのである。「満鉄」の設立をきっかけに、多くの日本人が日本から満洲に渡り、いわゆる日本人の渡満<sup>[1]</sup>の機運が高まった。「満鉄」の満洲開発という政策に導かれ、在満日本人は満洲において雑誌や新聞等の出版事業に手を入れ、文化の開発を始めたのである。1920年に「満蒙文化協会」によって創刊された日本語雑誌『満蒙之文化』（1923年に『満蒙』と改称）は「文化の開発」を目指す代表的な雑誌である。雑誌や新聞を主な対象として、在満日本人は当時の中国事情を調べているが、中

でも多いのが中国人の国民性をめぐる調査である。他方で、中国民謡は国民性を最も如実にかつ鮮明に反映しているため、在満日本人に重要な研究対象とされていた。1932年に「満洲国」が成立した後、在満日本人が書いた中国民謡に関する書籍が多数出版され、民謡研究の最盛期が迎えられたといえよう。それと共に、民謡の機能も明白になってきた。本研究では、雑誌『満蒙』の中に掲載された民謡を中心として、戦前戦時下の中国民謡を整理して分析する。第一節は在満日本人による中国民謡の研究を概観することで本研究の問題意識を明確にする。第二節は『満蒙』に掲載された民謡を分析し、民謡と国民性との密接な関係を検討する。第三節は具体的な民謡をとり上げ、民謡に現れる中国像をまとめ、その機能を示す。第四節は満洲新民謡を分析してその特色と機能を明らかにする。第五節は1930、40年代に現れた新詞類民謡を分析し、戦時下の民謡の働きを考える。最後に、以上の作業を通じて、戦前戦時下の中国民謡の機能の変化を明らかにする。

### 1. 中国民謡の研究の集大成と問題提起

「満洲国」が成立した後、在満日本人が書いた中国民謡に関する書籍が多く出版され、民謡研究の集大成の時代が迎えられた。1930年に稲川浅二郎が執筆した『満洲民謡曲譜』は中日文化協会によって刊行され、これは満洲時代において在満日本人の著した中国歌謡に関する最も早い単行本の一つであり、中国民謡を研究する集大成の第一作でもあると考えられる。

稲川の『満洲民謡曲譜』の中では曲譜だけではなく中国語の歌詞及び日本語で翻訳された歌意も丁寧に纏められており、稲川の中国民謡研究者としての姿勢が映し出されている。稲川の満洲における生活に関しては、1937年に発刊した中国語雑誌『明明』の主幹として活躍していたことが明らかにされているものの<sup>[2]</sup>、それ以外はすべて不詳である。1930年代に入ってから、稲川の『満洲民謡曲譜』をはじめ、多くの中国民謡を収録する単行本が刊行された。稲川のほか、松本二郎、加藤郁哉、瀬口秀郎、谷山つる枝、七理重恵等の、多くの中国民謡の研究に携わっていた在満日本人はこの時代に活躍しており、その研究の実績も多く残されている。なかでも、研究実績の数から考えると七理重恵について言及しなければならない。

七理の論著『支那民謡とその国民性』は1938年11月に明治書院によって刊行され、これは中国の国民性を研究する代表的な著作であり、特に論文の形で中国民謡を分析する資料の中では最も全面的かつ系統的な論述がなされている。七理は「民謡より見たる支那国民性」という題名をもって中国民謡の内容と特色を詳しく論じ、また、地方によって民謡を分類し、吉林省、黒龍江省、奉天省（今の瀋陽）、河北省、山東省、四川省など、当時の中国の21の省の民謡を取り上げた。七理の『支那民謡とその国民性』は日本人の間で幅広く読まれており、戦後の1946年には再版もされている。それ以外にも、七理は当時の東亜研究会が主催した「東亜研究講座」に積極的に参加し、1938年2月から1939年の12月までに『支那民謡選』、『支那民謡続選』、『支那民謡第三訳選』と、一連の「支那」民謡の訳作を発表している。1941年3月に彼の自著『支那民謡より捕捉したる結婚風景』も東亜研究会によって刊行された。

個人による中国民謡の研究に対して、集団による研究も非常に多い。満洲事情案内所<sup>[3]</sup>は1936年6月から1944年10月まで案内所報告として『満洲の伝説と民謡』の単行本を五回出版した。2007年に慧文社は36年版の『満洲の伝説と民謡』を再編して出版している。また、満洲事情案内所以外に、満洲弘報協会から出版された『蒙古の民謡と伝説』（1936年）、満洲国通信社から出版された『満洲の民謡』（1939年）も集団による研究の例として挙げられる。

以上で述べた民謡集と論著には一つの共通点がある。稲川の『満洲民謡曲譜』を除き、他の民謡集と論著には民謡のメロディーに関する研究はほとんど見当たらない。この状況に対しては、まず、『満蒙』の1929年3月号の編輯後記に掲載された『ぼろにいや』という童謡から見ておきたい。

ぼくおをにはを／はいてたら／ぼろにいやが／とほつたよ／ぼろないかおくさん／とい  
つたから／ぼくはおくさんで／ないけれど／メイユウブヨと／どなつたら／にいやがわら  
って／ゆきました

童謡の作者は柴田正一という当時七歳の子供である。在満日本人による中国民謡の研究が深まっていくと同時に、民謡と同じく子供の間に広く歌われる童謡も雑誌『満蒙』の中によく見られるようになった。本誌の編集者である中溝新一はこの童謡について、「誕生日記念に編まれた『ぎつこんいす』という童謡集からぬいたもの、ほんとうに満洲の子供らしい感覚が、私をうれしがらせます」と述べている（同編輯後記）。興味深いことに、中溝のいう「満洲の子供らしい感覚」は、童謡を「聞く」ことからではなく、「読む」ことから得られていたのである。実は、『満蒙』に掲載された民謡、童謡等の歌謡はそのメロディーが殆ど無視されていた。簡単に言えば、当時の在満日本人は中国の民謡、童謡をその芸術性からではなく、その内容から研究していたのである。なぜかと言うと、満洲時代においては在満日本人による中国民謡の研究は明確な目的を持つからである。この「目的」は上述した1936年版の『満洲の伝説と民謡』の序文から見当をつけることが可能である。

民情風習を究め、伝説を知ることは、その国の文化や、歴史や、国民性の生きた理解の上に最も重要欠くことの出来ない事柄である。満洲帝国が日本官民の援助と誘掖によって輝かしき建国理想の達成に邁進し行く時、これを導く一徳一心関係の「日本」が満洲国一般民情を認識することなくしては、提携も親善も形式のものに過ぎないであろう。この見地より当所は嘗て「満洲国」の習俗を公にして、日本人に対する満洲民情常識の涵養に資し、併せて満洲国文化工作に対する一小資料を提供せんと企てたが、今又本書を上梓してこれに拍車を加へんとするものである<sup>[4]</sup>。

つまり、「満洲国一般民情を認識する」ために、多くの中国民謡が集められ、研究され、重要な研究成果として出版されたのである。これまで日本で行われた中国民謡の研究は、主にメロディー、或いは音楽の角度から研究されたものである。そのなかで、増山賢治は「『中国民謡と民族舞踊曲(中国民族楽団、中国歌舞団)』<sup>[5]</sup>(XM-17-S 日本コロムビア 1967)の資料的価値――その収録曲と解説から看取されるもの」の中で1960年代の中国民謡と楽団を分析した。また、木村雅信は「中国民謡素材に基づく作曲」<sup>[6]</sup>の中で、中国民謡が日本における作曲に与えた影響を検討した。一方、文化の角度から中国民謡を研究するものは少ないが、何曉毅の中国民謡研究は存在する。彼は「「民謡」で見る最新中国像」<sup>[7]</sup>という論文の中で、戦後の中国の官僚、法律、道德などに関するイメージを民謡から分析した。この論述は中国の政治民謡、或いは新詞類民謡をめぐって展開され、メロディーではなく、主に内容の面から論じている。従って、戦後においては中国民謡の音楽の機能だけではなく、その文化を表す社会的機能も日本人に注

目されていたと考えられる。しかし、これまで戦前、或いは戦時下の中国民謡を研究する結果はまだ現れていないため、当時の中国民謡は如何なる機能を果たしているのか、という問題は検討する余地は残されている。よって、本研究は主に戦前戦時に発行された雑誌『満蒙』を研究対象とし、その中に掲載された中国民謡を扱い、当時の中国民謡に仮託された機能を検討してみたい。

## 2. 民謡の掲載と国民性の発見

雑誌『満蒙』における中国民謡及びその研究を辿ることを通じて、1920年代に在満日本人が中国民謡を収集・翻訳する活動を考察し、民謡の掲載と国民性の発見との関係を確認する。『満蒙』は初刊から終刊まで四半世紀にわたり、「満」・「蒙」に関する最大の総合月刊誌であり、終刊の1943年までに全部で281号が刊行されていた。その中には、多くの中国民謡が掲載されている。雑誌に多くの民謡が登場したのは当時の「満蒙の開発」の背景と関わっている。前述のように日露戦争の終戦に伴い、日本人の渡満の時代が訪れ、特に満鉄の成立をきっかけに、満洲に渡る日本人が増加した。この移民の風潮に乗って在満日本人、特に一部分の文化人は「満蒙の開発」を打ち出した。『満蒙』はこの「満蒙の開発」の背景の下で創刊されたものである。経済の「開発」だけでなく、文化の「開発」も在満日本人は重視した。この点は『満蒙』の「発刊の辞」からも読み取れる。

『満蒙之文化』は明鏡でなければならない。満蒙社会事象の一切を映発して、其の曇りなき真相を万人に徹底せしむるが、其の任務の一斑である。(略)然し乍ら本誌の使命は、単に此处に止まらない。更に進むで、満蒙開発終局の理想を実現し行く文化運動の前衛として、其常備軍たる満蒙文化協会の進路を決る指導的地位に立ち、以て本協会の公明なる開拓的活動を完成せしめなければならない。<sup>[8]</sup>

即ち、満蒙開発終局の理想を実現するために、文化の「開発」は前衛の働きを果たしている。発刊当初の誌面から見れば、地理と歴史の角度から行われる考察が多いが、その中に中国の国民性に関わるものも現れている。例えば、第4号に掲載された烏蘇里伝説「金牙太子と寛永王」(星武雄訳)は「支那」と「支那人」をめぐる言説である。いわば、国民性に対する研究は在満日本人による文化の「開発」の一環であった。一方、中国民謡は口頭文学として、中国の各民族の性格と文化を直接に反映しており、国民性の浸透が最も顕在化したものであるため、1920年代から『満蒙』に登場し始めたのである。

1925年6月号に松本二郎<sup>[9]</sup>の論文「民謡の中から支那を覗く」が掲載され、その中では、中国の社会における婚姻制度が論じられ、「近代新しい教育を受けた人はその訂婚制<sup>[10]</sup>に反抗し自由結婚を高唱するが、上海天津等の如く極めて開けた大都市に於て極少数の成功の例を見た以外に、其正当なる主張も強大なる伝統の前に悲惨なる屈服を遂げる」と述べられている。これは、雑誌『満蒙』において民謡から中国の社会制度を論じた最も早い声明である。そのタイトルから見ると、松本は「支那を覗く」という目的性を強調し、民謡でなく「支那」に焦点を当てている点が興味深い。つまり、松本は民謡を借りて中国の国民性を発見しようとする姿勢を取っている。彼自身もその動機について、「北京大学国文科で全国の民謡を蒐集発表した中に四十五首、私が古本屋から買った民謡集に二首、都合四十七首ある中から南北各々其地方の



特色、人情風俗を表現している」<sup>[11]</sup>と述べている。従って、松本は民謡を借りて「支那」の「南北各々其地方の特色、人情風俗」を「表現」しようとしていた。中国の国民性を考察する松本の動機は終戦まで変わらなかった。それ故、戦前戦時下に、メロディーから行われた中国民謡の研究は稀で、反対に、内容からの研究が非常に多い。それ以降、『満蒙』には在満日本人による中国民謡の研究と民謡の掲載が多くなってきた。「満洲国建国」の後の1930、40年代において、「民族の偽らざる声」<sup>[12]</sup>と見做される民謡は、中国の国民性を研究する第一の参考資料になった。

中国民謡は主に「社会」と「人」という二つのジャンルで国民性を反映している。

社会の面においては、1926年8月号の巻頭言に、青戸生（生年等不詳）の訳した「どうして」という吉林民謡が置かれている。民謡は雑誌『満蒙』が外部世界に発言する窓口のような存在となった。1927年6月号にJ.M. 生の文章「支那の民謡」は発表され、その中では中国の伝統的な民謡が多く取り扱われている。論者のJ.M. 生は歴史的角度から中国民謡の起源に遡り、民謡の中で非常に重要な地位を占めた「情歌」（恋愛民謡）を取り上げ、中国の婚姻制度と家長制を分析した。同時に、彼は中国の政治民謡を考察し、在満日本人が登場した新詞類民謡に関心を寄せ、「東海里／日本人／借名進兵保瑋春／装電話／設警兵／焼民／無理要求欺負人」<sup>[13]</sup>という吉林省に流行っていた新詞類民謡を、政治社会の一角を直接に表したものとして挙げた。新詞類民謡に関しては、村松一彌の研究の中に言及がある。

新詞類とは民国以来のはやりの唄・土地革命・抗日戦争・解放戦争中に、古い民謡の旋律に新しい内容の歌詞をつけたり、旋律・歌詞ともに新作のものなどを包括し、いわゆる「革命民歌」とよばれるものがその大部分を占める。（略）この大きな変化は中国の民謡の創り手たちが、外形の模倣などということより何よりもまずかれらの感情を唄に託して表現しようとしている。<sup>[14]</sup>

村松のいう新詞類民謡は「時代を反映し」、「変化」を「表現しようとしている」性格を持つ。つまり、新詞類民謡は社会の時代性を反映し、社会の新しい動向と深く関わっている。「日本人」のような民謡は当時の中国の社会と緊密につながっている。『満蒙』の誌面から見れば、最初に掲載された中国民謡の多くは中国の社会制度と状況を反映しているものである。明確に「人」を取り上げた民謡の出現はその後のことであった。勿論、すべての論述を完全に「社会」と「人」という二つのジャンルに分けられるはずはないが、早い段階における在満日本人の関心は社会のほうに傾いていた。

一方、人の面においては、1929年8月号に、「民謡に現れた支那の婦人」という無名子（生年等不詳）の文章が掲載されていて、これは『満蒙』における「人」を対象とする最初の民謡研究であると言えよう。論者は「支那」の婦人に関する民謡を整理し、民謡における女性のイメージを検討した。まず、その中の一つの民謡を見ておきたい。

小さい箕で糶つける、俺あ弟、あんたは兄哥。／酒でも貰って、一緒に飲んで、飲んで酔っ払って媳打とよ。／媳が死んだら何うしよう？／あんた太鼓で、俺あ銅羅打って、チャンヂャンドンドン又貰を。

社会地位の不公平に対して、無名子は「可弱い妻の唯一の頼り木は何うしても夫である。だが、未長く睦じき筈の夫婦だからと云っても、どうせ心と心の結びで出来たものぢや無ければ、途中で断れる無理がある」と述べている。中国の社会制度ではなく、まず「心と心の結び」という夫婦関係から始まった無名子の解説は、できるだけ人と接近しようとする視線を示している。無名子の論文が掲載された後、在満日本人による中国民謡の研究は社会研究という枠から国民性と直接に関わる人の研究までに細分化された。

よって、中国の社会と人との性格を映す中国民謡は中国の国民性を研究する重要な媒体であったと考えられる。在満日本人は中国の事情、特に国民性を知るために中国民謡を無視することはできない。それ故、1920年代から、在満日本人に創刊された日本語雑誌の多くに中国民謡及びその研究が掲載されている。この点が明らかになれば、当時、中国民謡は日本人が中国の国民性を調査する対象としての有効性を持っていたと想像できるだろう。

### 3. 民謡に現れた中国像

民謡の機能を検討する前に、在満日本人は中国民謡の研究を通してどのような中国像を作り上げたのかを分析する必要がある。なぜかという、時代によって異なる中国像は当時代の民謡の機能を反映しているからである。例えば、前述した何曉毅の政治民謡による中国像は「文化大革命時期」の中国社会を風刺する民謡の機能を表している。中国民謡の普遍性と特殊性については、七理重恵も「支那の民謡には、他の国々の民謡と大に異なった持ち味がある」<sup>[15]</sup>と指摘した。七理は『支那民謡とその国民性』（1938年）の中に「支那」の民謡を政治的民謡、家庭的民謡、恋愛民謡、年中行事を唱へる民謡、教訓を示す民謡、迷信を示す民謡といった類別で詳しく分類し、民謡に現れた「支那」の全体像を構築しようとしている。また、1936年に満洲事情案内所に出版された『満洲の伝説と民謡』も中国民謡を八つの種類に区分している。即ち、家庭生活に関する民謡、恋愛を盛れる民謡、社会政治に関する民謡、風刺的民謡、風俗的民謡、年中行事に関する民謡、子守唄・童謡風の民謡、叙事叙景的民謡である。その民謡編の担当執筆である谷山つる枝<sup>[16]</sup>（当時の満洲事情案内所委嘱調査委員）は中国民謡の特徴について次のように言及している。

好尚の角度から見て大部分が頗る卑近露骨、概して荒けづりで低級なやうである。しかしその半面、まことに屈託がなく素朴な情緒も溢れてゐて、なかなか面白いものがある。傾向としては日本などと反対に、恋愛感傷を盛ったものや叙事叙景風のもの少なく、家庭生活を反映したものの断然多いことが目に立つ。一体に感傷の影の薄いのは、民族の性格の顕著な現はれと見られよう。<sup>[17]</sup>

「卑近露骨」、「荒けづりで低級」、「屈託がなく素朴な情緒も溢れて」という表現が使われ、全体像を把握しようとする論者の志向を反映している。これに対して、1920年代の民謡研究の幅は相対的に狭い。1920年代に出版された中国民謡に関する著作は、ジャパントイムス社邦文パンフレット通信部<sup>[18]</sup>に発刊された「特輯」・『民謡に現れた支那の社会』（1928年）が見つかり、その中に、中国民謡は主に「婦人観」と「恋愛観」との二つのジャンルに分けられ、編集者の不破瑳磨太は、巻頭の「編者より」に「民謡と申しても彼の広い国全般に亘るのですから蒐集の一点だけでも些か自慢を申し上げても差支へぬかと存じます」と述

べている。「蒐集の一点」で「自慢」をしていた不破瑤のような在満日本人は、早い時期に中国民謡に対して新鮮味を持っていたことを読み取れる。言い換えれば、1920年代の在満日本人による中国民謡の研究は不完全で、中国の全体像を捉えることは難しい。それにもかかわらず、1930年代の成熟さに対して、1920年代の在満日本人による新鮮な解説は魅力的であった。1920年代に満日本人はどのような中国像を築いたのかを『満蒙』に掲載された民謡から見てみる。

『満蒙』の1929年4月号から1930年2月号までに、毎号の巻頭言では「支那民謡」を掲載した。実は、初めて巻頭言で民謡を掲載したのは1926年8月号で、前述の青戸生が翻訳した吉林民謡「どうして」である。1929年4月号からは「支那」の民謡が再び巻頭言に登場し、それ以降、翌年の2月まで連載が続けられ、民謡は雑誌の「窓口」となっているといえる。下は1929年4月号から1930年2月号まで巻頭言に掲載された民謡の一覧である。

- ①「田家の四季」 支那民謡 1929年4月
- ②「どうしておればかりを殺そうとするのだ」 支那民謡 1929年5月
- ③「いそがしい妻」 江蘇・浙江地方に行われる民謡 1929年6月
- ④まるいもの 湖北民謡 1929年7月
- ⑤金のなる木 興寧地方民謡 1929年8月
- ⑥月月花 浙江地方民謡 1929年9月
- ⑦娘の嫁入り 京兆地方に行われる民謡 1929年10月
- ⑧禽旅行軍歌 湖北地方の民謡 1929年11月
- ⑨中華国 遼陽地方の民謡 1929年12月
- ⑩ちいさい婿さま 南満地方の民謡 1930年2月

この一覧を見ると、中国の南北各地の民謡が集まっている。民謡から中国の全体像を捉えようとする編集者の意図はここにある。以上の10首の民謡を分類してみよう。

- 労働・生活を表す民謡：①④
- 価値観を表す民謡：②⑤⑧
- 家長制を表す民謡：③⑦⑩
- 季節/年中行事を表す民謡：⑥
- 政治を表す新詞類民謡：⑨

まず、民謡①④は中国人の労働形象と生活状態を描いた労働民謡である。中国民謡の中では、最も民謡らしいものは田植歌、麦打歌、船頭歌等の固有の生活感情がよく出ている労働民謡である。民謡①は代表的な田植歌であり、四季の転換への描写を通じて田家の「一家団欒」の生活像を描いている。歌意は以下の通りである。

春は春風／花も開けば草も伸び／蝶の飛ぶよな頃になりゃ／麦苗や桑の葉が／すくすく  
 おおきくなるよ／夏は百姓さんが／手まめに働く／蚕が済めば田植するよ／あしたに星を  
 戴いて／野良に出りゃ／ゆうべはお月さまが送ってくれる／秋は稲穂が／上上吉だよ／畑  
 は黄金色／身上は辛い／心のどかに安気だよ／冬は雪が晴れば／新しい綿入れが柔ら  
 かだよ／百姓仕事も一年経てばさ／一家団欒しんしよもふへるよ（『満蒙』の編集者訳）

田植歌に対して、稲川浅二郎に翻訳された「魚翁楽」は代表的な船頭歌である。

魚翁の楽陶然足り／小船に乗り身には蓑衣を穿つ／手には釣竿を執りて／船頭に立つ。  
 ／捉えし魚は籃に在り／金色の鯉皆鮮たり。／河の波浪は蛟龍を跳し／兩岸の楊柳糸を垂

る／柳は煙を含み、人唱ひ陽残る。／街上に魚を売って帰。／一杯の美酒を買ひて／魚を焼く／酒に酔ひて歌一曲／明月は前川に満つ。／魚翁の楽陶然足り（『満蒙』1930年1月号、186～187頁）

「魚翁楽」は漁民の生活を生き生きと描いたものである。民謡①の「一家団欒」と民謡④の「魚翁の楽陶然足り」は読者に安楽の中国像を築いた。勿論、安楽の中国像の構築は『満蒙』の編集方針とは関係がある。満鉄が成立した後に日本政府は満洲移民を宣伝しており、また、満鉄に干渉された各機関も各自の機関誌で移民の政策を高揚していた。民謡①、「魚翁楽」のような民謡を通じて構築した安楽の中国像はある程度、「動員」する機能を果たしていた。ところが、これだけではない。稲川は「此の曲は支那の古き或は曲の一部分と思はれる。歌詞は後人が附けたもので曲と一致しない点もあるが其のメロディが支那人の情性に合致してゐるので、今でも各所に歌はれてゐる」と指摘している。単なる紹介ではなく、その周辺の情報も詳しく集めた稲川の姿勢は当時の政策宣伝を超え、訳者自身の民謡に対する新鮮味を表している。従って、戦前に掲載された民謡は1930、40年代のものと比べると、純粹で、少なくとも政治面の影響を強く受けていなかった。それ故、この時期において在満日本人に構築された中国像は政策宣伝の影があるが、多彩かつ新鮮でもある。

民謡②⑤⑧は中国人の価値観を表しているものであり、民謡②からは勤勉至上、民謡⑤からは金銭至上、民謡⑧からは中国人の階級観念がそれぞれに見られる。労働民謡の写実に対して、価値観を表す民謡は一般的に言えば、「比・興」（メタファー）の手法を用いる。例えば、以下の民謡②のように、動物の間の会話を借りて人間の価値観を示している。

羊をなぜ殺さないのだ／羊は答へる「私の毛は年年たくさん剪られるのだ、鵝鳥を何故殺さないのだ」／（略）／馬は答へる「どうしてどうして人間を乗せるのだ、牛を何故殺さないのだ」／牛は答へる「田も耕せば仕事もしている、何故豚を殺さないのだ」／豚は答へる「けふは諸君がすっかり快活なのに、なぜ俺ばかりを殺そうといふのだ」（『満蒙』の編集者訳）

民謡③⑦⑩は中国の家長制を反映している。民謡③の「いそがしい妻」を見ていきたい。

一ついそがし 門あけ戸あけ、明るくなった。／（略）／9 ついそがし あちらこちらの寺まわり、珠数もばらばら／十々いそがし 閻魔大王へお見えしたく、なみあむだぶつ。  
（『満蒙』の編集者訳）

一から十まで妻の「いそがし」を数え続けたこの民謡は家長制の下で女性が如何に低い階層に立っているのかを反映している。同じく、1929年10月号に掲載された京兆地方の民謡「娘の嫁入り」の中に、「二度と帰るな嫁女ぢやゆけいよ。驢馬はほしいが娘はいらぬ」という一節があり、娘を軽視している父親の姿が読み取られる。これらの民謡を通して不公平な社会制度をもつ中国像を作り上げた。

労働・生活を表す民謡、価値観を表す民謡、及び家長制を表す民謡、この三種類の伝統的な民謡に対して、社会の新しい状況を表す新詞類民謡は、戦前の中国の社会をもっと深刻的に反映しているといえよう。例えば、民謡⑨は当時の政治と関わって「土匪」が出没する中国像を



描き、当時の社会状況の変化を表す新詞類民謡である。

よって、伝統的な労働民謡から社会状況を深刻的に反映する新詞類民謡まで、広い範囲で中国民謡を網羅する在満日本人の研究は、戦前戦時下の中国社会の実態を人々にイメージさせた。少なくとも、民謡から中国の全体像を想像する空間を作り上げたといえよう。「田家の四季」、「魚翁楽」のような労働民謡は安楽の中国像を示し、「どうしておればかりを殺そうとするのだ」のような生活民謡は勤勉、金銭至上等の価値観を表し、中国人のイメージを作り上げている。「中華国」に「土匪」が出没する場面を描き、「乱暴」な中国像も映している。これらの民謡は様々な中国像を示し、中国を発見する在満日本人の中国調査の機能を果たしていた。

#### 4. 満洲新民謡の風景

中国民謡の研究の深化に伴い、一つの新しい研究ジャンルとして、満洲新民謡が現れた。瀬口秀郎、稲川浅二郎と加藤郁郎らは満洲新民謡の研究者として次々に登場し、多くの満洲新民謡を翻訳し、満洲の社会における特有な風景を呈したのである。1927年6月号には瀬口秀郎の訳した「満洲新民謡集」が掲載され、その中に「磯の姑娘」「花頃」「馬肥草」「小娘」「杏花散」「明滅」「世捨人」「絹布売り」「曠野の午後」「丘の棗」、共に10首の満洲新民謡が紹介されている。瀬口によって在満日本人の中国民謡の研究は一層細分化され、満洲新民謡は人々の視野に入ってきた。中国全土の民謡と違い、満洲民謡だけにある独特の風景は瀬口らの満洲民謡の研究活動によって可視化されるようになった。

瀬口の「満洲新民謡集」は満洲の娘のさまざまな姿態を私たちに示している。新民謡の内容は当時の満洲における女性の社会地位をも反映している。しかし、これまで論じてきた中国民謡の中に現れた女性の低い社会地位に対して、瀬口の翻訳した満洲の新民謡は娘たちの勤勉、勇敢、可愛さを賛美したものが多い。その中から、「磯の姑娘」という民謡を挙げてみよう。

磯草は昼顔の花かよ／風もいとはぬ／雨もいとはぬ／船もこぎます／潮もくみます／けふはとなりの驢馬でさへ／まなこかくしされて麦粉ひき／妾しや傳家庄の磯そだち

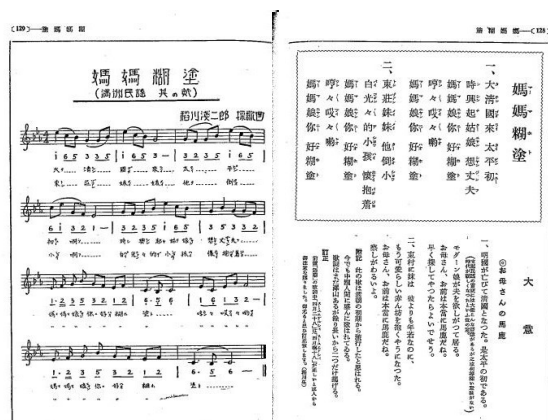
満洲の娘は自分を「磯草」に喩えている。「風もいとはぬ、雨もいとはぬ。船もこぎます、潮もくみます」という表現から当時の満洲に暮していた女性が強い自我意識をもっていると感じられ、つまり、満洲の女性が「主体性」を持っていたことが瀬口の新民謡から読み取れる。ここにいう「主体性」は、自分自身の存在を意識しながら積極的に行動することである。ただし、これまで論じてきた民謡の中では、家長制下の女性は殆ど自我意識がなく、受動的であった。当時、女性が軽視されることは一般的であった。瀬口の満洲新民謡にある活発な女性形象にたいして、稲川の訳した満洲の伝統的民謡の中には女性の「主体性」が見えない。1929年6月号に掲載された「趕廟」という民謡を見ておきたい。

四月の二十八日は、娘々廟のお祭りよ。／一家揃って香を焚く、子供授かるその為に。  
／寡婦の私が香を焚く、何の為だか分らない。（『満蒙』1929年6月号、122～123頁）

当時の中国では、一旦結婚したものは無論、まだ「訂婚」の間柄でも夫と定めた者が死んだ

ならば、どんなに若い女でも再び他の男と結婚することは非常な罪悪とされていた。物心のつかない幼い時に親同士で定めた相手が死んだため、一生独身で暮さなければならない女はたくさんいた。娘々廟は中国の出雲の神様であり、また子供を授ける神様とされている。寡婦であり、何の為に娘々廟のお祭りに行って香を焚くのか分からないにもかかわらず、習慣通りに行動している「私」には反抗するという行動力がない。瀬口が『満洲新民謡集』の中で示した娘々廟のような強い「主体性」は「趕廟」の「私」の身からは感じられない。この点から見ると、瀬口秀郎が訳した満洲新民謡は中国社会の一つの独特な風景であったといえる。

瀬口の新民謡に対して、稲川浅二郎の研究した満洲の民謡は殆ど伝統的なものである。が、彼は歌意を考究するだけではなく、民謡のメロディーにも関心を寄せていた。図①のように民謡の歌意を説明すると同時に紙面に曲譜を付けている。また、稲川の満洲民謡の研究は伝統物、歴史物が多く、満洲の歴史を認識する知識体系を構築しようとする意図が含まれている。1929年7月号に掲載された「お母さんの馬鹿」を解説する際に「民謡は清朝の初期から流行したものであると思われる」という歴史的考察にはこの傾向がみられる。稲川による中国民謡の研究は内容的に時代性を欠いていたが、満洲歴史の考察から言えば、特別であった。



図①『満蒙』1929年7月号「媽媽糊塗」

加藤郁哉は在満日本人を描写する民謡に興味をもち、多くの満洲新民謡を翻訳した。その中で、1929年3月号、4月号及び6月号に掲載された「満洲民謡集から」で満洲の新民謡を三回連載し、満洲にいる日本人の姿を示していた。例えば、日本娘子軍<sup>[19]</sup>に関する民謡として挙げられた「千里の野火」は満洲にいる一部の日本人女性の生活を反映し、「国のたより」を知りたいという日本娘子軍の故国日本に対する深い思いを表している。

くれりやちろちろ／千里の野火よ／わたしや野に咲く／エ、ねぢあやめ／野火はちろちろ／鏡にちろちろ／国のたよりも／あれきりやんで／今ぢやちろちろ／阿片をこがす(『満蒙』1929年4月号、126～127頁)

もう一種の民謡、「燕人群」は当時の満洲に渡る日本人の期待と不安を反映している。

あすは著くのか／甲板（デッキ）の板目／日がな日の下／夜は星の下／荒れた海原／耕すやうな／辛い生計が／待つのかないか／桃の季節に／戦争が三年／息子とられた／あの土地すてて／ひらり、くらりと／満洲へ渡る／つまされ燕に／身が細る（『満蒙』1929年6月号、118～119頁）

加藤の訳した満洲民謡は、当時の日本人の渡満や在満日本人の現実生活等を反映した。明治維新の後、実は、日本人の目指した外国はまずハワイやアメリカであり、その移住の動機は日本よりも高い賃金を得ることにあつた。満洲はまったくその条件を満たしていなかったのである。多くの日本人が満洲と関わった最初の契機は日清戦争であり、当時の満洲は依然として人

口稀薄な未開の地であった。この時期、日本人の女性は娼婦として満洲に渡ってきたのである。上の言及した民謡「千里の野火」は娼婦としての彼女のことを指している。一方、日露戦争後、戦時の軍人以外の渡航禁止令はまず営口と安東で解除されたので、日本兵相手の商売を行い、「一旗」あげようとする日本人が満洲にやってきた。日本兵を追い求めて渡満した日本人の商人は、日本兵の撤退後、苦しい状況に陥ったのである。大連では日本兵相手の商売は1908年には成り立たなくなり、日本人商店には淘汰の波がうちよせていたのである。また、満鉄の設立をきっかけにして仕事のチャンスが増えると共に、日本人の渡満の波を迎えたのである。夢があれば不安もある当時の「燕人群」と言われた渡満日本人がこの波に乗ったのである。

瀬口秀郎、稲川浅仁郎と加藤郁哉が訳した満洲民謡は特別な「満洲」像を作り上げた。しかし、掲載された民謡の内容から見れば、その考察の目的は変わっていない。つまり、中国の国民性を考察するという民謡の機能は在満日本人にまだ重視されている。

## 5. 新詞類民謡の抵抗

1930年代に入った後、特に、1931年に「満洲事変」が勃発した後、在満日本人による中国民謡の研究は政治的な影響を強く受けたため、民謡の社会的な機能がますます強くなり、社会の新状況を反映する新詞類民謡は一層増えた。実は、1920年代には日本人が中国の新詞類民謡の中に登場し始めていた。前に言及していた「日本人」といった民謡がその例である。この民謡は当時の、「支那」で起こった「排日」の風潮を反映している。訳者のJ.M.生のこの新詞類民謡に対する解説は非常に興味深い。

排外思想は年と共に旺んになって行くは明らかであるが、私はそれよりも何時まで経っても植民地に在る日本人の尻の穴の小さいことを痛感するものだ。大体幾ら感ぐろい日本人でももう支那の排日の原因が奈辺にあるかぐらい感付いてもよかりそうなものだ。排日の原因は一は勿論政治に根底をおくもので旅大問題がその最大なるものではあるが、これは理論的に論拠を有つものであれば、それが為の排日は毫も恐れるところに非ず腑仰恥づるところは無いものである。<sup>[20]</sup>

「植民地に在る日本人の尻の穴の小さいことを痛感するものだ」、「日本人」の「奈辺にある」というJ.M.生の「良心」的な論説と姿勢は明確に見える。しかし、1930年代に入った後、『満蒙』におけるこのような民謡の掲載はごく稀になり、公正の姿勢を取って中国民謡を論じる説は見えなくなった。例えば、1930年6月号の巻頭に「東洋貨」という短い童謡があるものの、その「日貨排斥」の原因を明確に伝えていない。

東洋貨、不耐久、早上買来、夜裏破。／那像我們中国貨、用了一世也不破。

歌意は以下の通りである。「日本品は永持しない、朝買って来て晩には破ける。どうして我が支那品とくらべものにならう、一生着ても襤褸にならむ、一世用っても毀はれはせぬ」（『満蒙』同号掲載）。該号の編集者は「支那の日貨排斥の宣伝が、幼弱な小学児童の頭にも痛々しく深く沁みている」と指摘している。ここでは、中国の排日思想の高まりの原因を「支那」の

「宣伝」に無理に理由づけている傾向がうかがえる。また、1933年1月号には羽皐生（生年等不詳）の訳した「満洲歌謡集」が掲載され、その中に収録された「外国帽」という新詞類民謡は「支那人」の眼の中にある日本人の様子を表している。

外国帽頭上戴／金腿眼鏡眼上跨／糯米牙鑲金牙／文明棍手中拿／阿殺西手極挾／日本洋火一扑拉／開口先説日本語／罵人叫巴哈／吃飯叫米西／臨走給个大嘴巴

日本語に訳すると、「中折帽子を頭に戴せ、金縁眼鏡を鼻にかけて、細い揃った歯に金歯をはめて、ハイカラなステッキを手にもって、指の間に「朝日」を挟み、日本のマッチでパッと火をつけて、口を開くなり日本語をお喋り、人を罵るに「馬鹿」といひ、御飯をたべることを「ミシ」といふ。そして終ひにはピシヤリと頬を一つなぐって飛んで行く」<sup>[21]</sup>。この新詞類民謡に対して、論者の羽皐生は「日本語の片言を覚えて、生意気な格好して威張り散らす満洲人を描写したもの。満洲に日本の勢力が入り込んだ頃、此種の満洲人が多かったのであらう」と述べている。「生意気な格好して威張り散らす満洲人」という偏見を含む解説は日本人の立場から来たと言えるだろう。

「満州国」が成立した後、中国に新しく作られた新詞類民謡は当時の社会状況と深くかわり、抵抗の一面がますます強くなった。新詞類民謡は殆ど当時の在満日本人に無視され、雑誌などにデビューする機会も見つからないほど少なかった。即ち、新詞類民謡は在満日本人に、ある程度無視されていたといえる。雑誌や新聞などに掲載された僅かの新詞類民謡はその真意が日本人に歪曲され、民謡の「外国帽」のように「満洲人」の「威張り散らす」姿を批判する手段として「利用」されている。

1930年代の新詞類民謡について、当時の中国側の言説、或いは、戦後日本の一大部分の言説の中には以上の解説と異なる論も見出すことができる。例えば、田久川の論文「簡論大連地区反対日本殖民統治的詩歌歌謡」の中には当時の多くの新詞類民謡が収録された。その中の一つの民謡から見ていきたい。

哇来哇来哇，一日三餐苞米渣。／哇来哇来哇，王道樂土不知道。<sup>[22]</sup>

この新詞類民謡の第一、第三句の「哇来哇来哇」は日本語の「われわれは」の音訳である。歌意は以下の通りである。ある日、一人の日本人の官僚は下の村へ「巡視」しに来て「民情」を察すると共に「王道樂土」を宣伝する。彼は村の人に「君たちは何を食いますか。以前より今の暮らしはどうですか」と聞いた。村の人の中に日本語を少し話せる人がいる。すぐ「われわれは、一日三餐苞米渣」と答えた。「われわれの今の暮らしは苦しくて、一日三餐は苞米渣（トウモロコシのお粥）を飲むしかない」という意味である。日本人の官僚はこの返事を聞き、すぐ「今、一日三餐は苞米渣を飲むしかないが、もうすぐ白ご飯を食べられますよ。われわれは王道樂土を創っていますから。皆さんは知っていますよね」と言った。この時、村の人々は皆笑った。「われわれは王道樂土不知道（知らない）」と返事をした。この新詞類民謡は当時の日本人の言った「王道樂土」を風刺している。

それに、新詞類民謡は日本帝国主義が満洲に行った「日本語教育」の様子も反映している。民謡の中で日本語が交じるという多言語混用の表現は多く見られ、非常に一般的であった。例えば、前に述べた「外国帽」の中に出てきた言葉「阿殺西」「巴哈」「米西」はそれぞれ「朝」



「馬鹿」「飯」の音訳である。当時の日本帝国主義による日本語教育に対して、中国人は抵抗していた。その抵抗の状況も新詞類民謡の中に跡を残している。

日本語、不用学、再過三年用不着；／日本語、不用听、再過三年全得扔；／日本語、不用練習、再過三年全得变。<sup>[23]</sup>

歌意は以下のようである。「日本語を学ぶ必要がない、三年後使えないよ；日本語を聞く必要がない、三年後捨てられるよ；日本語を練習する必要がない、三年後変わるよ。」（筆者訳）この民謡に対して、論者の田久川は「戦前、日本の近代教育は軍国主義に満たされていた。一方、その植民地には遂行した近代教育は赤裸裸な「奴化教育」であった。その目的は教育の手段を使って根本から他国を征服し、或いは亡ぼそうとする」<sup>[24]</sup>と述べている。日本は中国の大連を占領した後にこの「奴化教育」を開始し、その重要な内容として学校では日本語教育を実施したのである。

在満日本人によって翻訳、紹介された中国民謡は文化的手段として中国の一般の民情を深く考察し、日本帝国主義を鼓吹していたという面がある。1930年代に入ってから、多くの「抵抗」的な新詞類民謡が作られたが、勿論、その大部分は翻訳されずに中国語のまま中国人の間に歌われていた。よって、新詞類民謡は社会の現実状況と最も接近し得る民謡として、当時の中国人にとって一種の抵抗の武器であったと言ってもよい。

在満日本人に外された「抵抗」的な新詞類民謡は、当時の中国社会に存在した新詞類民謡の大部分を占める一方、日本人に翻訳、紹介された「鼓吹」の民謡は僅かな一部分であった。そう考えると、在満日本人による「鼓吹」と中国人による「抵抗」という二項対立の民謡の機能を見出すことができた。J.M. 生の『支那の民謡』で書かれた言葉を借りれば、「政治と民謡は何国に於ても相離れない関係を持つものであるが、それも多くは悪罵か賛美かの両極端に限られているやうである」<sup>[25]</sup>。

## おわりに

雑誌『満蒙』は1920年の初めに創刊され、その中に多くの中国民謡が掲載されていた。これらの民謡はさらに在満日本人に工夫され、中国の事情、特に国民性を考察する手段として使われていた。1920年代から終戦までの戦前戦時下には、在満日本人による中国民謡の研究は「満州国建国」を裂け目として二つの時期に分けられる。前期は国民性を調査するために中国全土の民謡を研究する1920年代であり、後期は「民族協和」「王道楽土」を鼓吹する満洲民謡を主に研究する1930、40年代である。また、前期においては、在満日本人は中国民謡で「安楽」の労働生活、「勤勉至上」「金銭至上」の中国人の価値観、及び戦時下の不安定などの中国像を作り上げた。これらの中国像は不完全であるように思われるが、一種の新鮮味が溢れ、また政治からの影響が強くなかったため、多彩かつ新鮮である。一方、後期においては、主に満洲の民謡を中心に紹介し、その中には中国人の排日に抵抗する在満日本人の見解が読み取れる。在満日本人は中国民謡から全体の中国像を捉えようとしたが、日本帝国主義の発展に伴い、新詞類民謡が殆ど無視され、歪曲されたため、結局、完全な中国像は捉えられなかった。しかし、これらの無視された新詞類民謡は中国人の間に歌われ、日本帝国主義が宣伝した「王道楽土」

を風刺し、抵抗の手段として使われていた。一言でいえば、1920年代には中国民謡の機能は主に在満日本が中国の国民性を考察する手段であったが、1930年代に入ってから、中国民謡、特に新詞類民謡はかえって中国人が日本帝国主義に抵抗するための道具になったのである。

- 
- [1] 渡満は日露戦争後に日本人が満洲に渡ることを指す。
- [2] 李青、「東北淪陥期文学の一側面——疑遅が描いた“満洲国”を中心に」、『大谷学報』85(4)、2006～2007年、34頁。
- [3] 満洲事情案内所は1933年に満洲経済事情案内所の名称で満洲国政府、駐満日本大使館、南満洲鉄道株式会社の後援を得て設立された。1934年に関東庁、駐満海軍司令部の後援を新たに加え、満洲事情案内所と改称される。日本からの視察団の案内等の任にあたる。新京記念館内より新京中央通六番地に移転される。1936年、株式会社満洲広報協会に合併し、その直営となる。1938年に満洲広報協会より分離独立し満洲帝国政府特設機関となる。
- [4] 『満洲の伝説と民謡』、満洲事情案内所、株式会社慧文社、1936年11月、序言。
- [5] 増山賢治、コロムビア世界民俗音楽シリーズ『中国民謡と民族舞踊曲（中国民族楽団、中国歌舞団）』（XM-17-S 日本コロムビア 1967）の資料的価値——その収録曲と解説から看取されるもの、『愛知県立芸術大学紀要』34号、2004年、17～31頁。
- [6] 木村雅信、「中国民謡素材に基づく作曲」、『札幌大谷短期大学紀要』35号、2004年、113～152頁。
- [7] 何曉毅、「「民謡」で見る最新中国像」、『東亞經濟研究』59(3)、2001年、277～316頁。
- [8] 『満蒙之文化』第1号、発刊の辞。
- [9] 松本二郎（松本三本）は当時満洲に「支那」を研究していた研究者で、1925年に著作『支那の民謡』は日本堂書店から出版された。
- [10] 訂婚とは婚約することである。
- [11] 松本二郎、「民謡の中から支那を覗く」、『満蒙』1925年6月号、111頁。
- [12] 七理重恵、『支那民謡とその国民性』、明治書院、1938年11月、3頁。
- [13] J.M. 生、「支那の民謡」、『満蒙』1927年6月号、118～119頁。
- [14] 村松一彌、「中国の民謡」、『北斗』2(6)、中国文学会、1957年4月、333～337頁。
- [15] 同[8]、7頁。
- [16] 谷山つる枝は「支那」民俗の研究者で、1935年に著作『満洲国の習俗』は満洲事情案内所から出版された。また、1938年に『満洲の習俗と伝説・民謡』は松山房から出版された。
- [17] 『満洲の伝説と民謡』、満洲事情案内所、1936年11月、序言。
- [18] ジャパンタイムス社邦文パンフレット通信部は主として海外諸国の政治、経済、産業、科学、思潮、文藝その他あらゆる方面の新事情、新知識を翻訳・解説し、時に内外の重要な問題に関し専門大家の権威ある研究を紹介する。大体一冊一題が標準である。
- [19] 日本娘子軍とは19世紀の後半に東アジア・東南アジアに渡って娼婦として働いた日本人女性のことを指す。こうした日本人女性の海外渡航は、当初世論において「娘子軍」として喧伝されている。
- [20] 同[9]、118頁。
- [21] 羽阜生、「満洲歌謡集」、『満蒙』1933年1月号、170頁。
- [22] 田久川、「簡論大連地区反対日本殖民統治的詩歌歌謡」、『中日关系研究的新思考 中国東北与日本国際學術検討会論文集』（馬興国編）、1993年、123頁。
- [23] 同[21]、123頁。
- [24] 同[21]、123頁。
- [25] 同[9]、116頁。